



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

近代期における東京都上野地区の商業特性と空間構造の変化（論説）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森山,知毅 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/166773

近代期における東京都上野地区の 商業特性と空間構造の変化

森山 知毅*

キーワード：商業特性，空間構造，商業地変容，近代期，上野地区

I はじめに

1. 研究の目的と方法

東京都心部において繁華街と呼ばれる大商業地は、郊外へ伸びる私鉄ターミナル周辺に成長した新宿や池袋、渋谷など、関東大震災以降に形成されたものが多い。それに対して、神崎（1993）も指摘しているように江戸時代から今日まで江戸・東京を代表する商業地であり続けているのが上野地区である。したがって、上野地区の特徴や構造を理解するためには長期的な視点が求められる。

上野地区の先行研究として、松澤（1986）や神崎（1991）は上野地区の土地利用図から、同地区が駅から近い順に繁華街、歓楽街、公共施設街が立地する三層同心円構造になっていることを指摘した。太田ほか（2016a, 2016b, 2017）による上野地区の一連の研究では、年代ごとの主な業種の変化や、靴・衣料品・食料品などの店舗を核とし、ここから離れると地域住民向けの店舗が多くなることを明らかにした。しかし、これらの研究のうち、神崎は模式図のみを示しており、具体的なデータがなく実証性の点で課題が残る。また太田ほか（2016a；2016b）は、第二次世界大戦以降（以後、戦後とする）を対象時期とし、太田（2016b）は、「上野のれ

ん会」に加盟する一部の店舗のみを対象としている。

長期的な視点から商業地を実証的に分析した研究として、牛垣（2003）は、都心周辺に位置する神楽坂地区を対象とし、明治初期から現在にかけての商店街の業種構成の変化を明らかにした。しかし、これ以外に東京を代表する商業地の長期的な変遷や内部構造を明らかにした研究は管見の限りない。そこで本研究では、上野地区を対象とし、明治初期から1950年代にかけての業種構成と店舗分布の変化から、上野地区の商業特性や空間構造の変化とその背景を明らかにすることを目的とする。

主な資料として、商人録・商工録や「火災保険特殊地図」（都市整図社）を使用する。さらに『台東区史』などの文献を用いて上野地区の商業特性について補足する。本研究で取り上げた3時期のうち、明治初期とした1880年は、1883（明治16）年の上野駅開業や1914（大正3）年完了の市区改正事業¹⁾といった近代都市整備以前にあたり、徒歩交通であった江戸時代の上野地区の様子をうかがうことができる。昭和初期とした1931年は、1903（明治36）年に馬車鉄道に代わって路面電車が登場し、都市内における高速交通が確立された時期である。また1923（大正12）年の関東大震災とその後の

* 越谷市立越ヶ谷小学校（学部66期）

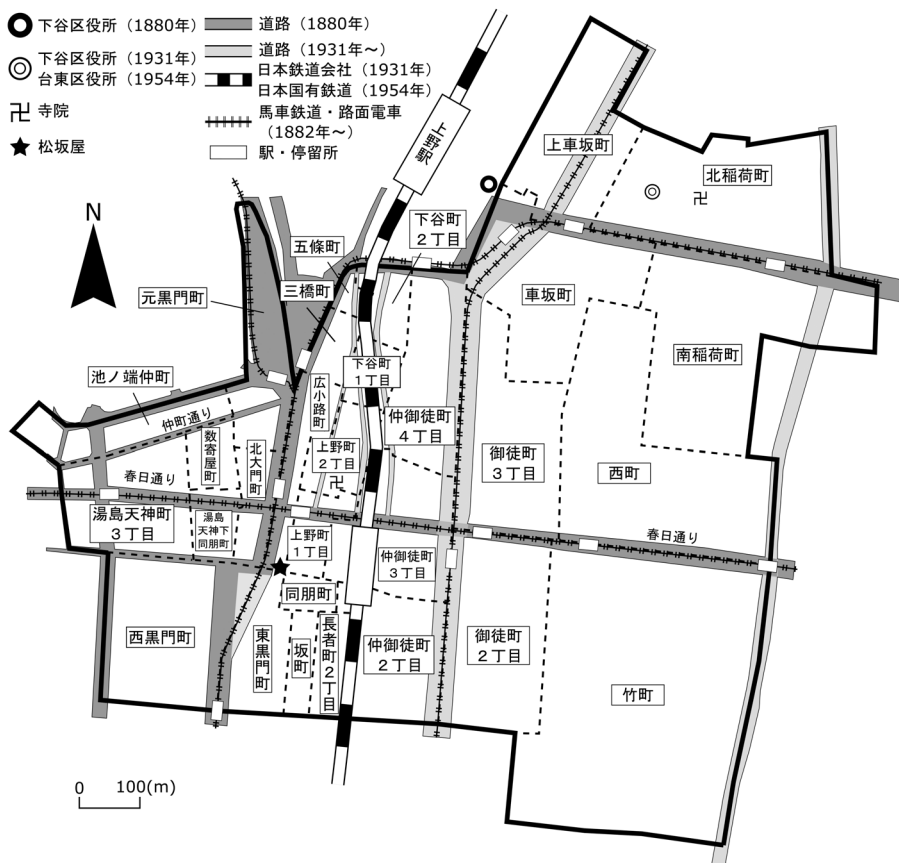
復興事業が終了した時期でもある。戦後の1950年代とした1954年は、京成線が1933（昭和8）年の開業から20年ほどが経過し、郊外鉄道のターミナル駅としての機能を有しはじめた時期であり、闇市としてアメ横が誕生した後の時期でもある。本研究では、近代期を中心に考察し、さらに第二次世界大戦の戦災復興が進行した1950年代も合わせて分析する。

2. 研究対象地域の概要

上野地区の概要を第1図に示した。商業地としての上野の出発点は、1625（寛永2）年に江戸城の鬼門にあたる上野に東叡山寛永寺が建立

されて門前町が形成されたことに始まる。火災の延焼を防ぐために火除地が設けられると、仮設の見世物小屋や茶屋ができ、江戸を代表する盛り場として賑わった。

明治時代以降、1873（明治6）年に上野公園が開園し、1877（明治10）年に第1回内国勲業博覧会が開催、1882（明治15）年に日本初の動物園として上野動物園が開園されるなど、上野地区は東京における芸術・文化の中心であった。1882（明治15）年には鉄道馬車が日本橋—上野—浅草間の運転を開始し、1903（明治36）年には同区間で電車が開通した。1923（大正12）年に関東大震災が発生し、東京は壊滅的な



〔「五千分一東京図測量原図」(1883年)、「大東京區分圖三十五區之内下谷區詳細圖」(1937年)、「火災保険特殊地図」(1954年)より作成〕

第1図 上野地区の概要

被害を受けたが、2年後には現在の山手線が全線開通し、環状運転を開始した。1927（昭和2）年には、日本初の地下鉄が上野－浅草駅間で開業した。また1933（昭和8）年には京成線上野駅が開業した。京成線は上野駅を通る初めての私鉄郊外鉄道となり、これにより上野駅は郊外鉄道のターミナル駅としての機能をもちはじめた。

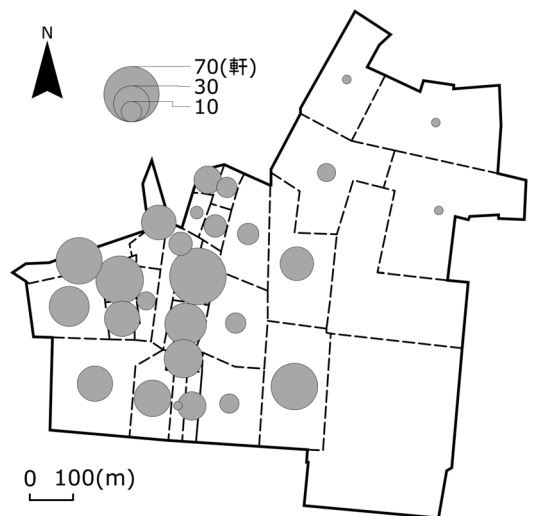
第二次世界大戦がはじまると、上野駅は軍事輸送と学童疎開の拠点となった。戦後は春日通りの近くにアメリカ製の宝石や衣料、雑貨などを扱う「アメ横」と呼ばれる一大商業地が形成された。上野駅は東京都心部の北の玄関口として、北関東や東北、北陸方面からの人々を迎え入れた。特に戦後間もない時期には食糧調達のため、1950年代後半からは地方の若年労働者の集団就職のために多くの人々が上野駅を利用した。上野地区は1883（明治16）年の上野駅開業以来、東北方面への鉄道の起点としての役割を担っていた。

Ⅱ 明治初期の上野地区の商業的性格

明治初期の商業地の様子を分析する資料として『東京商人録』（1880年）²⁾を用いた。『東京商人録』に記載のある業種は合計293業種あ

り、そのうち対象地域内の102業種、608軒を抽出した。この分布を示したものが第2図、業種別店舗数を示したものが第1表である。

店舗数が最も多いのは上野町2丁目（73軒）で、数寄屋町（52軒）、御徒町2丁目（50軒）、池ノ端仲町（49軒）と続く。広小路付近の上野町1、2丁目や同朋町などに店舗の集積がみられる。前述したように広小路は江戸以来の一大商業地であったことから、店舗数が最も多い。



（『東京商人録』（1880年）、「五千分一東京図測量原図」（1884年）より作成）

第2図 上野地区における明治初期の町丁目別店舗分布

第1表 上野地区における明治初期の業種別店舗数（1880年）

業種名	店舗数	業種名	店舗数	業種名	店舗数	業種名	店舗数
藝妓商	43	下駄商	16	理髪職	8	筆墨商	6
醫者	36	和洋小間物商	14	鐵物商	8	油商	5
米商	31	藥商	13	八百屋商	7	茶葉商	5
荒物商	30	染物商	11	建具商	6	唐物商	5
菓子商	26	湯屋商	10	呉服太物商	6	鼈甲商	5
古着商	25	烟草商	10	糸物商	6	その他	140
古道具商	25	芋商	9	紙商	6		
酒醬油商	20	桶類商	9	書肆	6		
炭薪商	17	諸藝人	8	足袋商	6		
魚商	16	袋物商	8	陶器商	6	合計	608

全650軒のうち、製造業と判断できる「〇〇職」を除く608軒を対象とする。ただし、「〇〇商職」「醫者」「理髪職」は商業やサービス業と判断し、対象に含めた。

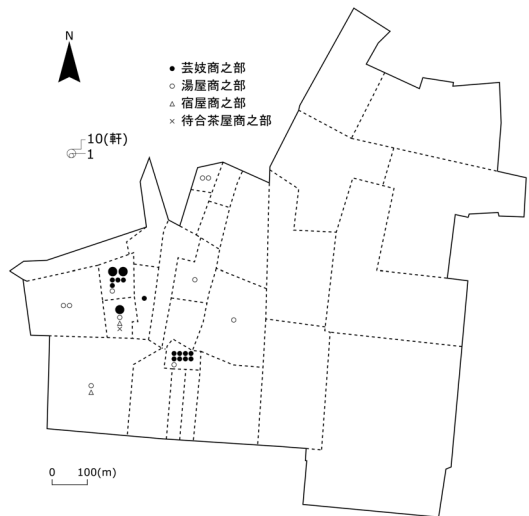
（『東京商人録』（1880年）より作成）

『台東区史 上巻』によると、上野町には摩利支天横町と呼ばれる一帯があり「毎月、亥の日を縁日とし（中略）明治の頃は特にこの縁日は非常な賑わいを見せ」³⁾ しており、これがアメヤ横町の前身となる。また池ノ端仲町や数寄屋町、湯島天神町3丁目、湯島天神下同朋町の一帯にも集積がみられる。上野のれん会⁴⁾が発行している地域情報誌『うえの』によると、「この町筋は下谷から湯島天神に通じ、本郷小石川方面にゆく、狭いながらも往時のメインストリートの一つであった」⁵⁾ という。班目(1989)も湯島切通坂から池ノ端仲町を抜け、広小路に向かう通りが昔の目抜き通りであったと述べている。そのため、この一帯は老舗が多く、現在でも営業している店舗として、福神漬の「酒悦」や薬局の「守田宝丹薬局」などが有名である。この通りは仲町通りと呼ばれ、江戸時代以前から店舗があった。『うえの』には「太田道灌のその昔、不忍池がいまより広がったころ、この仲町通りのあたりが南縁の堤であった。その堤を人は往来し、おのずからそこに店がたちならぶ」⁶⁾ とある。その後、東叡山寛永寺が建立され、池ノ端仲町は寛永寺の門前町として「人形町芝日蔭町と共に江戸三場所とよばれる繁栄を招いた」⁷⁾ ようである。つまり、仲町通り一帯は明暦の大火後の防火対策として広小路が設けられる以前から、商業地が形成されていたと思われ、これにより広小路に次ぐ集積があったと考えられる。御徒町2丁目については『台東区史 上巻』によると、江戸時代には御徒衆⁸⁾であった人々が明治維新によって失業し、商業の道を目指す「武士の商法」を試みたことから一時的に店舗が多くなった可能性がある。

上記以外は、広小路を中心に店舗が集積している。江戸時代までは、武家屋敷や「御徒町」と地名がつく場所には御徒衆の居宅があったた

め、一定数の店舗が存在した。西町と竹町については店舗がみられないが、発展が遅れた理由について『台東区史 上巻』では、江戸時代までは武家屋敷が町の大部分を占めていた点と、広小路から離れており交通上不便な場所だった点を挙げている。

次に第1表をみると、芸妓商(43軒)が最も多い。『台東区史 上巻』によると、明和年間(1764～1772年)頃から広小路町を中心に「けころ」と呼ばれる私娼の家が多数でき、その範囲は数寄屋町や北大門町などにも次第に広がった⁹⁾。天保の改革により一旦は衰退したが、「けころ」は水茶屋に姿を変えて繁昌したという。芸妓商の分布をまとめた第3図によると、数寄屋町に24軒、湯島天神下同朋町に10軒、同朋町に8軒立地しており、当時の中心地である広小路町や、上野町2丁目に隣接するように花街が立地している。花街の立地傾向について加藤(2005)も、当時の花街は複数の街区にまたがり、中心商店街、駅前、盛り場などの商業



(『東京商人録』(1880年)、「五千分一東京図測量原図」(1884年)より作成)

第3図 上野地区における明治初期の芸妓関連業の町丁目別分布

地や遊郭に隣接する傾向があると指摘している。陣内（1992）は盛り場が水辺空間に隣接するように立地すると述べており、上野地区の北側に不忍池があることも花街の位置に関係していると考えられる。なお芸妓に関連する業種として、待合茶屋商が湯島天神下同朋町に1軒みられる。

次いで注目されるのは古着商と古道具商（各25軒）である。一方で呉服太物商はわずか6軒にとどまっている。江戸時代は高度なりサイクル社会であり、古着商は江戸市中に4,000人近く存在したといわれている¹⁰⁾。『東京商人録』には、古着商や古道具商の他にも瀬戸物を修理する焼ツギ商や、分析対象外とした鋳物を修理する鑄掛師などの掲載もあり、江戸時代の様子を色濃く残している。衣服に関連する業種として洋服洗張商があり、すでに洋服が流通していたこともわかる。一方、名称に「洋服」を含む業種はみられない。当時、新しい衣服を購入することができるのは一部の富裕層のみで、庶民の多くは古着商から衣服を購入していたと考えられる。また、「洋服商」のカテゴリーがないことから、洋服が古着商で扱われていた可能性もある。

現代では、繁華街の中に多い業種の一つとして飲食サービス業が挙げられる。『東京商人録』において飲食サービス業と判断できる業種は「料理商之部」「飯屋居酒屋商之部」「蕎麦商之部」「鮓商之部」「鰻商之部」「団子商之部」の6つで15軒あった。広小路周辺の町丁目のほか、数寄屋町など花街への集積もみられる。当時の飲食サービス業は花街での需要に応えるためにその周辺に立地していたと考えられる。

菓子商・飴商（2軒）は合わせて28軒あり、現在のアメ横でも菓子店が多い。上野町2丁目、三橋町、東黒門町、池ノ端仲町、御徒町2丁目にそれぞれ3～4軒みられる。上野町2丁

目を中心に同心円状に、また所々中心から離れた場所にも分布している。

このほか、江戸時代の特徴を色濃く残す業種として下駄商や足袋商などが挙げられる。また牛肉商やランプ商など、明治維新以前には存在しなかったと思われる業種もみられる。

Ⅲ 昭和初期の上野地区の商業的性格

1. 1931年の商業特性

この時期の商業地の様子を分析する資料として『大日本商工録』（1931年）¹¹⁾を用いた。『大日本商工録』に記載のある業種は合計933業種あり、そのうち分析に用いたのは対象地域内の84業種、全288軒を抽出した。前述の『東京商人録』に比べ、業種数、店舗数ともに大幅に少ない。その原因は主に時代背景と資料の掲載率にあると考えられる。帝都復興事業により道路が拡幅され、1925（大正14）年には上野－神田駅間の鉄道高架が完成したため、物理的に店舗数が減少した可能性がある。また『大日本商工録』が発行された1931年は関東大震災から8年しか経っておらず、商業については大震災以前の規模にまで未だ復興していなかったと思われる。これら資料的制約を踏まえた上で、店舗数を地図上にまとめたものが第4図、業種別にまとめたものが第2表である。

第4図によると、広小路町22軒、元黒門町21軒、湯島天神町3丁目16軒、上野町2丁目12軒となっている。これは明治初期同様、広小路周辺や花街周辺に位置することが理由と考えられる。また御徒町3丁目で15軒、車坂町で14軒と店舗数が比較的多い。これは1883年に上野駅が開業したことにより駅利用客向けの店舗が立地したと思われる。広小路や上野駅から最も離れた竹町は、明治初期には店舗がなかったが、昭和初期には39軒と上野地区内で最も多い。

面積が大きいことも理由の一つとして考えられるが、『台東区史 上巻』¹²⁾には公園が開設されないうちに繁華街ができたと記されている。

次に第2表によれば、最も多いのは和洋各料理 (23軒)、次いで旅館 (18軒)、和洋菓子類製造 (17軒) となっている。和洋各料理をはじめ、飲食サービス業と判断できる業種¹³⁾は、広小路町、北大門町、三橋町などの広小路周辺と、湯島天神町3丁目をはじめとする花街周辺に立

地している。最も店舗数が多い町丁目は元黒門町 (10軒) である。飲食サービス業の中でも和洋各料理が最も多く、これらは花街の飲食店や、上野公園へ訪れる人をターゲットとした店舗と考えられる。このほか、飲食サービス業は上野駅に近い下谷町2丁目や五條町などにも多いが、上野駅のすぐ東側に位置する車坂町や仲御徒町4丁目などには少ない。

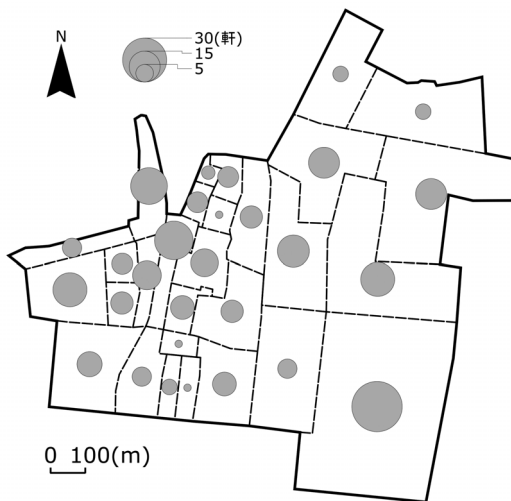
次いで多いのは旅館であった。第5図を見る

第2表 上野地区における昭和初期の業種別店舗数 (1931年)

業種名	店舗数	業種名	店舗数	業種名	店舗数	業種名	店舗数
和洋各料理	23	書畫骨董 (新古道具)	8	紙器紙工品	4	真鍮地銅	3
旅館	18	蕎麥饅頭 (小料理)	7	諸履物類	4	青物果實 (賣買仲立)	3
和洋菓子類 (製造)	17	薪炭煉炭	7	新古衣類	4	打刃物類 (大工道具)	3
呉服綿布和洋諸織物類	13	和洋酒類 (味噌醬油)	7	文房具類	4	和洋諸紙類 (文房具)	3
和洋諸金物類 (銅鐵材)	11	洋品雜貨	6	和洋家具類	4	その他	67
喫茶店 (団子饅頭)	10	壽司 (小料理)	6	寫真器械 (附属材料)	4		
餅菓子・汁粉類	10	ゲートル	5	萬小間物類	4		
新古洋服 (裁縫)	10	諸機械 (工具・附属品)	5	櫛・箸・髪飾用品	3		
羅紗仕立物類	9	米穀・精米	5	書籍雜誌	3		
食堂酒場 (飲食物)	9			小間物・封筒	3		
金融 (質物)	8					合計	288

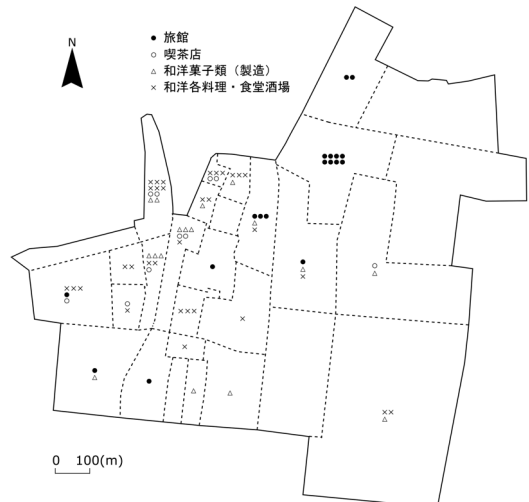
全435件のうち、「製造」「製作」の語句が含まれるものを除く288棟を対象とする。

(『大日本商工録』(1931年)より作成)



(『大日本商工録』(1931年),「大東京區分圖三十五區之内下谷區詳細圖」(1937年)より作成)

第4図 上野地区における昭和初期の町丁目別店舗分布



(『大日本商工録』(1931年),「大東京區分圖三十五區之内下谷區詳細圖」(1937年)より作成)

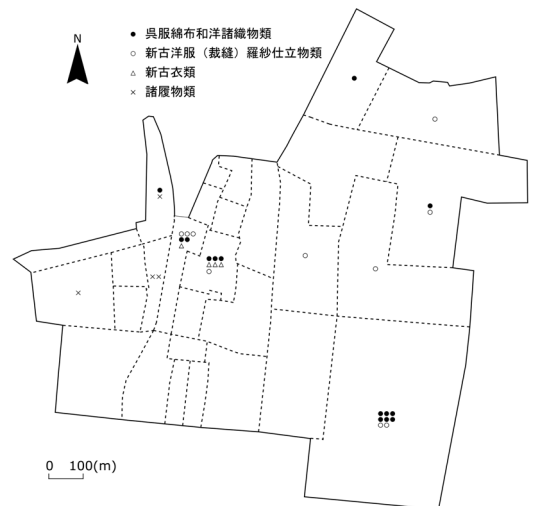
第5図 上野地区における昭和初期の宿泊業・喫茶店・和洋菓子類・飲食店の町丁目別分布

と、旅館は車坂町が最も多く8軒が立地しており、仲御徒町4丁目に3軒、上車坂町に2軒立地している。これらの町丁目は広小路からは離れて上野駅に近く、駅の利用客が旅館を利用していたと考えられる。上野駅は東北地方への起点だったことから、長距離移動者や上野駅前で宿泊し、翌日上野駅から移動する人が利用していた可能性もある。当時の旅館の様子について、松澤（1986）は「上野駅前にはじつに数十軒の旅館が軒を並べ（中略）周囲はほとんど旅館ばかりであった」と述べている。喫茶店は元黒門町や広小路町、三橋町など広小路を中心に分布している。上野地区に初めて喫茶店ができたのは1888（明治21）年とされており、喫茶店がある街は、流行に敏感でおしゃれな街として認識されていたとも考えられる。飲食店や和洋菓子類は広小路周辺の町丁目に多い。

織物・衣服関連業は、呉服綿布和洋諸織物類が11軒、新古洋服（裁縫）羅紗仕立物類が10軒、諸履物類と新古衣類が各4軒である。この分布をまとめた第6図をみると、店舗数は竹町で最も多く8軒ある。これについて『台東区史上巻』は、佐竹本通商店街という衣料品専門店街があった¹⁴⁾と説明している。商店街の顧客についても「附近ノ住民、山手方面ノ俸給生活者及び其ノ他ノ方面ノ人各々三分ノ一ヲ占ム、其ノ内労働者ハ全顧客ノ五分一見当ナリ」と述べている。『うえの』にも「古着屋の町は、たとえば竹町八丁堀の居職の職人衆など、ひろく下町一帯の庶民に支えられていた」¹⁵⁾とある。衣料品の専門店街として、職人等の労働者といった庶民向けの衣服を販売していたと考えられる。松坂屋が百貨店として営業を始めたのは1907（明治40）年のことであり、それまでの呉服に加え、家庭用品や雑貨などの販売も始めた。これより、織物・衣服関連業については、高級品は広小路などの中心地で、庶民向けの商

品は竹町など周縁の衣料品店で購入するという棲み分けがなされていたと考えられる。

竹町のほかには、上野町2丁目や広小路町で織物・衣服関連業店舗がみられる。これについても『うえの』の中で「上野町といえば、柳原、日蔭町と共に、知らぬ者なき古着屋の町であった。（中略）上野町は、古着屋と縁日の町としての個性を持ち」¹⁶⁾と述べている。第6図から新古の区別はつけられないが、新古衣類を扱う店舗が4軒確認できる。現在ではアメ横と広小路の間に上野中通り商店街、通称「上中（うえちゅん）」があるが、この時期には上野町通りとしてすでに商店街があり、また、徳大寺や常楽院などの寺院が多数あったため、縁日でも賑わったという。このほかの特徴的な点として、「洋」という字を含む業種が多くなった点や、紙関連店、金属を扱う店などが現れている点が挙げられる。



（『大日本商工録』（1931年）、「大東京区分圖三十五區之内下谷區詳細圖」（1937年）より作成）

第6図 上野地区における昭和初期の織物・衣服関連業の町丁目別分布

2. 明治初期から昭和初期にかけての変化

本節では、町丁目別店舗数と業種別店舗数、さらに各業種の分布傾向について、明治初期から昭和初期にかけての変化を読み取る。前述のとおり、『大日本商工録』は『東京商人録』に比べ、店舗の掲載数が減少していることを踏まえて考察を行った。

はじめに町丁目別店舗数に着目する。第3表は町丁目別店舗数とその割合をまとめたものである。明治初期には上野町2丁目12.0%、花街だった数寄屋町で8.6%、御徒町2丁目8.2%、仲町通りがあった池ノ端仲町で8.1%と割合が高い。昭和初期になると、竹町で最も割

合が高く12.8%となっている。また、明治初期に2.1%だった広小路町で7.6%、4.6%だった元黒門町で7.3%となっており、広小路に隣接していることが影響していると考えられる。明治初期には、広小路に隣接する町丁目が上位を占めるが、昭和初期になっても広小路町や元黒門町はその傾向を強めている。これに加えて上野地区東部の竹町や西町、上野駅に近い車坂町が上位に入っている。

次に、各時期における主な業種の店舗数の変化をみる。宿泊業は、明治初期にはわずか2軒で、広小路や花街に隣接する町丁目で見られた。1883年に上野駅、1903年に馬車鉄道が電化

第3表 上野地区における1880年～1954年の町丁目別店舗数と割合の推移

(単位：軒、%)

1880年			1931年			1954年		
町丁目名	店舗数	割合	町丁目名	店舗数	割合	町丁目名	店舗数	割合
上野町2丁目	73	12.0	竹町	37	12.8	竹町	226	8.7
数寄屋町	52	8.6	広小路町	22	7.6	湯島天神町3丁目	182	7.0
御徒町2丁目	50	8.2	元黒門町	21	7.3	上車坂町	179	6.9
池ノ端仲町	49	8.1	湯島天神町3丁目	16	5.6	仲御徒町3丁目	166	6.4
上野町1丁目	40	6.6	西町	16	5.6	上野町2丁目	162	6.2
湯島天神町3丁目	37	6.1	御徒町3丁目	15	5.2	南稲荷町	161	6.2
同朋町	34	5.6	南稲荷町	15	5.2	車坂町	156	6.0
東黒門町	31	5.1	車坂町	14	4.9	西町	139	5.3
湯島天神下同朋町	29	4.8	北大門町	13	4.5	御徒町3丁目	134	5.1
西黒門町	29	4.8	上野町2丁目	12	4.2	仲御徒町4丁目	128	4.9
元黒門町	28	4.6	西黒門町	10	3.5	御徒町2丁目	111	4.3
御徒町3丁目	26	4.3	上野町1丁目	9	3.1	下谷町2丁目	96	3.7
長者町2丁目	19	3.1	仲御徒町2丁目	9	3.1	西黒門町	93	3.6
五條町	18	3.0	湯島天神下同朋町	8	2.8	下谷町1丁目	76	2.9
広小路町	13	2.1	仲御徒町4丁目	8	2.8	北稲荷町	70	2.7
下谷町1丁目	12	2.0	数寄屋町	7	2.4	広小路町	67	2.6
仲御徒町4丁目	11	1.8	三橋町	7	2.4	仲御徒町2丁目	53	2.0
下谷町2丁目	10	1.6	下谷町2丁目	7	2.4	元黒門町	51	2.0
仲御徒町3丁目	10	1.6	仲御徒町3丁目	7	2.4	三橋町	47	1.8
仲御徒町2丁目	9	1.5	池ノ端仲町	6	2.1	北大門町	46	1.8
北大門町	8	1.3	御徒町2丁目	6	2.1	数寄屋町	46	1.8
車坂町	8	1.3	東黒門町	5	1.7	上野町1丁目	45	1.7
三橋町	4	0.7	坂町	4	1.4	五條町	41	1.6
坂町	2	0.3	上車坂町	4	1.4	東黒門町	41	1.6
上車坂町	2	0.3	北稲荷町	4	1.4	湯島天神下同朋町	37	1.4
北稲荷町	2	0.3	五條町	3	1.0	池ノ端仲町	34	1.3
南稲荷町	2	0.3	下谷町1丁目	1	0.3	長者町2丁目	15	0.6
西町	0	0.0	同朋町	1	0.3	坂町	5	0.2
竹町	0	0.0	長者町2丁目	1	0.3	同朋町	2	0.1
合計	608	100.0	合計	288	100.0	合計	2,609	100.0

(『東京商人録』(1880年)、『大日本商工録』(1931年)、火災保険特殊地図(1954年)より作成)

し路面電車が開業した¹⁷⁾後の昭和初期には18軒に増加し、上野駅に近い町丁目に多く、広小路付近にはみられない。

芸妓関連業は、明治初期（第3図）には芸妓商が43軒、待合茶屋商が1軒あった。昭和初期については『大日本商工録』に芸妓の記載がないため、松川二郎の『全国花街めぐり』（1929）、『三都花街めぐり』（1932）を参考にした。昭和初期には芸妓置屋が約160軒、待合が約110軒あり、芸妓置屋については明治初期に比べ約4倍となっている。このころの数寄屋町一帯の花街について、松川（1932）は東京の花街の中で新橋や柳橋、赤坂、日本橋などの1等地に次ぐ2等地の一例として挙げており、大規模な花街だったことがわかる。

飲食サービス業は、昭和初期には55軒に増加している。明治初期には花街や広小路でみられたが、昭和初期には花街に隣接する元黒門町でも増加している。また、上野駅の近くでも店舗のない町丁目があることから、飲食サービス業の増加は、必ずしも駅利用者のためではなく、むしろ明治初期から拡大した花街での需要や、上野公園など観光客からの需要に対するものだった可能性がある。これより、上野地区の飲食サービス業はかつての花街を中心に集積しているといえる。また、喫茶店が広小路を中心に分布していることから、広小路周辺では百貨店と同様に近代的な店舗が立地し始めたと考えられる。

織物・衣服関連業は、71軒から32軒に減少している。明治初期には下駄商や足袋商が池ノ端仲町に集積しているが、衣料品店は上野町2丁目を中心となっている。昭和初期になると、上野町2丁目はその中心性を維持しつつ、竹町に衣料品専門店街ができ、2つの中心ができたと考えられる。

菓子関連業は28軒から17軒と減少している。

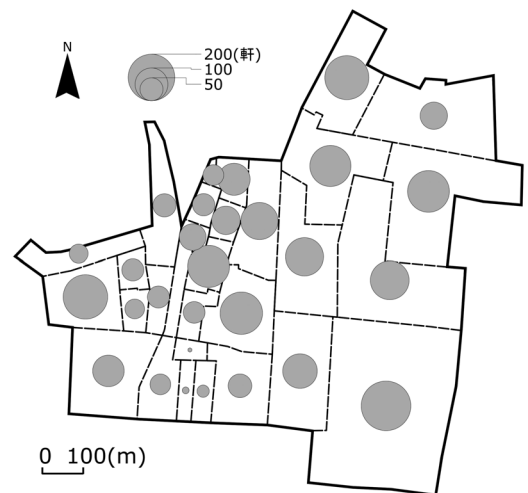
明治初期には上野町2丁目を中心として数軒分布していたが、昭和初期には広小路町や北大門町などにも分布している。

Ⅳ 1950年代の上野地区の商業的性格

1. 1954年の商業特性

この時期の商業地の様子を分析する資料として「火災保険特殊地図」（1954年）を用いた。一部の業種は地図上で記号化されているが、それ以外は商店名から判断して日本標準産業分類を参考に分類し、対象地域内の30業種、全2,609軒を分析に用いた。店舗数を地図上にまとめたものが第7図、業種別に表にまとめたものが第4表である。

店舗数が多いのは竹町（226軒）、湯島天神町3丁目（182軒）、上車坂町（179軒）であるが、これは面積の大きい町丁目と対応している。比較的面積は小さいが、店舗数の多い町丁目は上野町2丁目（162軒）、下谷町2丁目（96軒）、下谷町1丁目（76軒）である。これらは現在



（「火災保険特殊地図」（1954年）より作成）

第7図 上野地区における1950年代の町丁目別店舗分布

のアメ横や上野中通り商店街、高架下の飲食店街の位置と重なりその影響を受けていると考えられる。同朋町や坂町、長者町2丁目で店舗が少ないのは、町丁目の範囲の大部分が鉄道用地として使用されているためと思われる。湯島天神町3丁目は182軒の店舗があり、鉄道高架西側の町丁目では最も店舗数が多い。

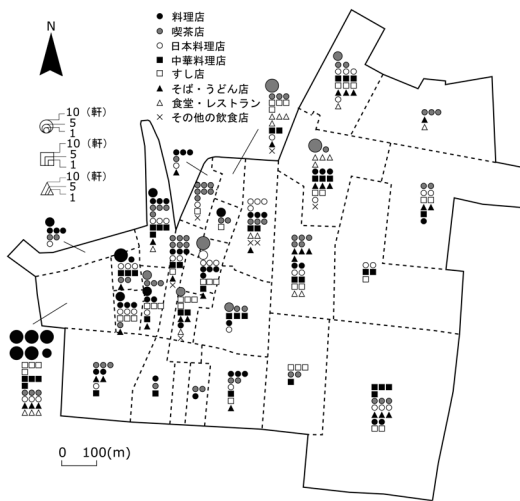
次に第4表をみると、最も多い業種は飲食サービス業¹⁸⁾の597軒で、全体の約23%を占め

る。次いで多いのは織物・衣類関連業¹⁹⁾の365軒、飲食料品関連業²⁰⁾の326軒である。そこで、飲食サービス業を酒類提供店とそれ以外に分類し、酒類提供店以外の店舗分布を示したのが第8図、酒類提供店の店舗分布を示したのが第9図である。第8図をみると、上野地区東部や南部は店舗が少なく、上野駅や上野公園に近い町丁目は店舗が多い。明治初期、昭和初期と花街だった湯島天神町3丁目でも多く、85軒

第4表 上野地区における1950年代の業種別店舗数 (1954年)

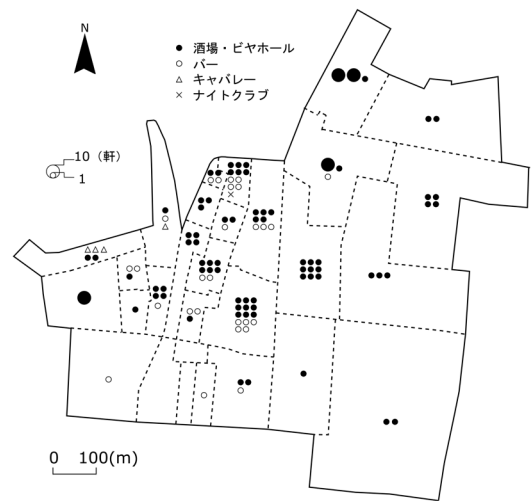
業種名	店舗数	業種名	店舗数	業種名	店舗数
飲食サービス業	597	娯楽業	64	自動車関連業	12
織物・衣類・身の回り品関連業	365	生活関連サービス業	53	公共施設	9
飲食料品関連業	326	じゅう器関連業	52	デパート・百貨店	4
菓子関連業	232	家具・建具・畳等関連業	50	情報通信業	4
宿泊業	131	自転車関連業	49	スーパーマーケット	3
書籍・文房具関連業	106	電気機械器具関連業	37	運輸業	1
医療業	92	娯楽用品関連業	32	映像・音声・文字情報制作業	1
理容・美容業	86	不動産業	22	自動車等関連業	1
医薬品・化粧品関連業	84	その他の娯楽業	18		
カメラ・時計・眼鏡関連業	83	古道具関連業	16		
金融・保険業	67	教育・学習支援業	12	合計	2,609

(「火災保険特殊地図」(1954年)より作成)



(「火災保険特殊地図」(1954年)より作成)

第8図 上野地区における1950年代の飲食サービス業 (酒類提供店以外) の町丁目別分布



(「火災保険特殊地図」(1954年)より作成)

第9図 上野地区における1950年代の飲食サービス業 (酒類提供店) の町丁目別分布

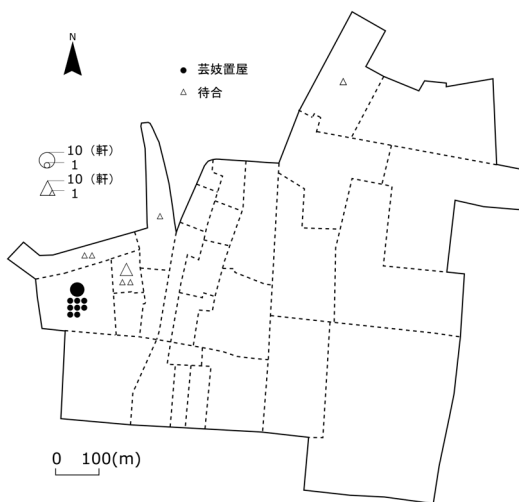
の飲食サービス業がある。数寄屋町（35軒）や湯島天神下同朋町（17軒）など、花街を構成している町丁目でも比較的店舗が多い。上車坂町（43軒）、下谷町2丁目（42軒）、車坂町（40軒）は上野駅前であり、駅利用客の利用が予想される。アメ横や上野中通り商店街がある上野町2丁目（35軒）でも多い。第9図をみると、酒類提供店は上車坂町（21軒）や五條町（4軒）、仲御徒町3丁目（14軒）など、上野駅前のほか、御徒町駅や路面電車の停留所がある町丁目にも店舗が多い傾向である。酒場やバーなどは上車坂町や湯島天神町3丁目に立地している。キャバレーは花街に隣接する池ノ端仲町（3軒）、元黒門町（1軒）にある。湯島天神町3丁目には酒場・ビヤホールが10軒あるが、数寄屋町や湯島天神下同朋町には酒類提供店の集積がほとんどみられない。

芸妓関連業の分布を示した第10図をみると、芸妓置屋が湯島天神町3丁目のみに18軒、待合は数寄屋町12軒、池ノ端仲町2軒、元黒門町と

上車坂町に各1軒ある。昭和初期の最盛期ほどの店舗数はみられないが、戦災から再興させようとしている様子がみられる。芸妓置屋は湯島天神町3丁目のみに、待合についても数寄屋町にそのほとんどが集積している様子を見ると、町丁目ごとに棲み分けがなされていたと考えられる。

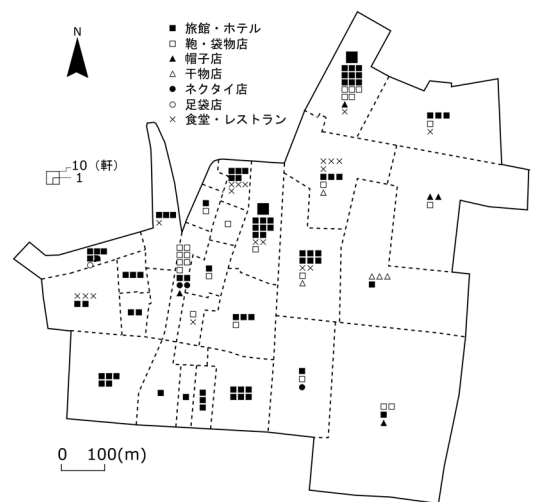
宿泊業は、上野地区に131軒の旅館があった（第11図）。1950年代には食糧調達や集団就職のために多くの人が上野駅を利用したためか、駅前には多くの旅館が立地している。松澤（1986）は、駅利用客のための業種は旅館だけではなく、土産物を扱う店舗や食堂なども多かったと述べている。

織物・衣類関連業（第12図）は、竹町で最も多く53軒の店舗があった。前述した衣料品専門店街の性格が1950年代になっても残っていたと考えられる。上野町2丁目を中心とした分布となっているとともに、上車坂町や湯島天神町3丁目でも店舗が多い。小分類別では多く



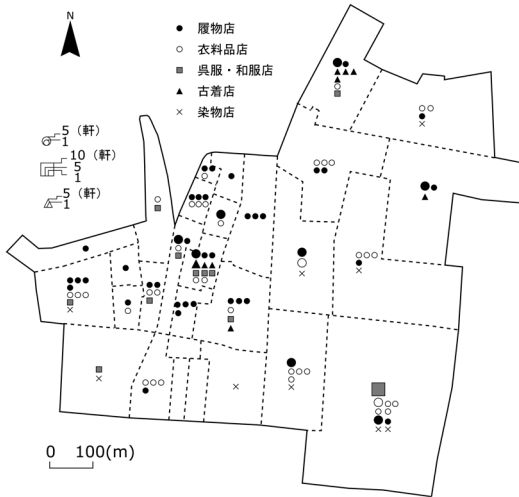
（「火災保険特殊地図」（1954年）より作成）

第10図 上野地区における1950年代の芸妓関連業の町丁目別分布



（「火災保険特殊地図」（1954年）より作成）

第11図 上野地区における1950年代の宿泊業・土産物店・食堂の町丁目別分布



(「火災保険特殊地図」(1954年)より作成)

第12図 上野地区における1950年代の織物・衣服関連業の町丁目別分布

の町丁目で履物店が多くなっている。竹町では呉服・和服店、衣料品店が多い。この時期は、松坂屋が百貨店として営業を始めてから半世紀近く経過しているが、竹町は呉服・太物店が最も多く、これに次いで衣料品店が多い。竹町は衣料品専門店街として百貨店の影響をあまり受けず、独自の商圈を有していたと考えられる。呉服・和服店は竹町にも多いが、アメ横や上野中通り商店街がある上野町2丁目にも多い。松坂屋に近い上野町2丁目で織物・衣服関連業が集積しているのは、上野駅から松坂屋に向かう人の流れが影響していた可能性もあり、松坂屋との共存ともいえる。

飲食料品関連業は、上野町2丁目(18軒)や下谷町1丁目(12軒)などアメ横のある町丁目や、上野地区東部の竹町(27軒)や西町(16軒)、西部の湯島天神町3丁目(18軒)などに店舗が多い。小分類別でみると、上野町2丁目や下谷町1丁目は食料品店のみとなっているのに対し、竹町や西町、湯島天神町3丁目など、アメ横や広小路から離れた町丁目では業種が多

様になる傾向がある。

菓子関連業は、仲御徒町3丁目(50軒)や上野町2丁目(36軒)、下谷町1丁目(34軒)に集積がみられる。これらの町丁目は「火災保険特殊地図」を見ると、そのほとんどが鉄道高架下であり、菓子関連業の集積地だったと考えられる。

2. 昭和初期から1950年代にかけての変化

本節では、町丁目別店舗数と業種別店舗数、さらに各業種の分布傾向について、昭和初期から1950年代にかけての変化を読み取る。

はじめに町丁目別店舗数に着目する(第3表)。昭和初期に割合が高かった竹町は、1950年代になってもその傾向が続き8.7%となっている。これに加えて湯島天神町3丁目は1.4%増加し7.0%となった。昭和初期に割合が高かった広小路町や元黒門町は、それぞれ2.6%、2.0%に減少している。1950年代になると広小路町や数寄屋町などは上位10町丁目には入らず、駅前に隣接した町丁目で割合が高くなっている。

次に各時期の主な業種の店舗数の変化をみていく。宿泊業については、1950年代(第11図)も昭和初期と同様に上野駅に近い町丁目が上位3町丁目となっている。

芸妓関連業は、1950年代は芸妓置屋が18軒、待合が16軒と昭和初期に比べ大きく減少している。町丁目別の店舗数がわかる明治初期と比較すると(第3図、第10図)、明治初期の段階では数寄屋町と隣接する湯島天神下同朋町、同朋町で集積がみられるが、1950年代には湯島天神下同朋町と同朋町の芸妓置屋がなくなり、新たに湯島天神町3丁目に芸妓置屋がみられる。松川(1932)によると、1929年までは数寄屋町と湯島天神下同朋町それぞれに芸妓組合があったが、1929年以降は2つの組合が合併したとある。1950年代は、湯島天神下同朋町側の芸妓関

連業の店舗が、規模の大きかった数寄屋町や新たに湯島天神町3丁目に移転したと考えられる。同朋町の芸妓商については町丁目の範囲のほとんどが鉄道高架下となったため、同朋町の芸妓商が廃業した、または規模の大きい数寄屋町一帯の花街に移転したと考えられる。

飲食サービス業については、1950年代（第8図、第9図）は597軒に大幅に増加した。今日では、飲食サービス業は大規模商業地の主要な要素といえるが、明治初期や昭和初期はそれほど多くはなく、戦後に増えた業種といえる。1950年代は花街に隣接する町丁目や上野駅前にも多い。明治初期から昭和初期にかけては広小路や花街に近い町丁目で増加しているが、昭和初期から1950年代にかけては、この傾向に加え、それまでみられなかった上野駅に近い町丁目での増加もみられる。

織物・衣服関連業（第12図）は、1950年代になっても上野町2丁目と竹町の織物・衣服関連業の集積がみられる。つまり、上野町2丁目は織物・衣服関連業の中心として明治初期から1950年代にかけてその性格を維持しており、昭和初期以降、竹町にも庶民向けの衣料品を販売する店舗が現われたといえる。

菓子関連業は、1950年代になると232軒へと急増している。『日本洋菓子史』によると、第二次世界大戦中に価格および配給統制されていた小麦粉や砂糖などが、1949（昭和24）年末から次第に規制緩和された²¹⁾。また『明治製菓四十年小史』によると、日常生活の必需品として「菓子の啓蒙」の呼号を目的とした戦後初の菓子展覧会が松坂屋において開催された²²⁾。この2点が1950年代の菓子関連業急増に影響を与えたと考えられる。各時期の分布をみると、1931年は上野町2丁目に分布し、1950年代には主に鉄道高架下やアメ横に沿って分布している。菓子関連業は上野町2丁目や広小路町を

中心としながらも時期ごとに分布が多少異なり、特に1950年代は鉄道高架下やアメ横に集積している。

食料品関連業は1950年代になると、スーパーマーケットなど食料品全般を扱う食料品店が上野町2丁目（18軒）や下谷町1丁目（9軒）を中心に現れた。一方、明治初期には店舗がなかった竹町や西町など、広小路や上野駅から離れた町丁目では、比較的多業種かつ多店舗みられる。竹町や西町は住宅地だったため、地域住民向けと考えられる庶民向けの食料品関連業が分布していたと思われる。広小路町や元黒門町、数寄屋町（各1軒）では店舗は少ないが、湯島天神町3丁目（18軒）で多いのは、同町丁目に飲食サービス業が多いことが関連していると考えられる。

V 考察

本研究では、東京都上野地区を対象として、明治初期から1950年代にかけての上野地区の商業特性や空間構造の変化とその背景を明らかにした。

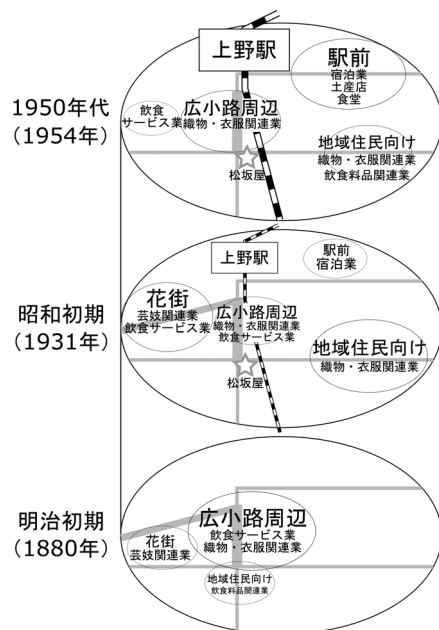
上野駅が開業していない明治初期には、織物・衣服関連業や古道具商、飲食サービス業などが広小路を中心に立地する構造であった。広小路を繁華街とすると、これと隣接するように歓楽街が立地しており、神崎が述べる三層同心円構造と一致している。昭和初期には、飲食サービス業については広小路に隣接する町丁目でも集積がみられたが、上野駅に隣接する町丁目でも集積がみられ中心性が移動していると考えられる。これと似た傾向は宿泊業にも指摘できる。織物・衣服関連業については、竹町に地域住民向けと考えられる庶民向けの衣料品専門店街ができた。神崎の三層同心円構造では、駅から離れた場所に住宅ができることを指摘して

おり、竹町に衣料品専門店街が立地したことと対応する。これは飲食料品関連業の立地でも同様である。芸妓関連業は昭和初期に最盛期を迎え、1950年代になると湯島天神町3丁目などの花街を中心に料理店が立地し、酒場やバーなどは上車坂町や湯島天神町3丁目に立地している。これは三層同心円構造と一致する。織物・衣服関連業は上野町2丁目と竹町で集積がみられる。駅を中心とする三層同心円構造では最も中心に近い繁華街に洋品店が立地するとしているが、本研究では駅ではなく、江戸時代に盛り場として最も賑わった上野町2丁目に中心性がみられ、この点は神崎と異なる。しかし、昭和初期から1950年代にかけてはおおむね駅を中心とした立地となっており、三層同心円構造と重なる点もある。松澤(1986)や神崎(1991)が述べている三層同心円構造は、主に高度経済成長期以降を対象としているが、時代や集積する業種に違いがあるものの、上野地区のような大規模商業地では、明治初期から1950年代にかけても機能分化が生じていた。また、明治時代からの機能分化が現代の空間構造にも影響しているとも考えられる。

太田ほか(2016a)が指摘する小地域内の業種構成の差異については、明治初期にも飲食サービス業が広小路を中心に立地していることや、芸妓関連業が数寄屋町や湯島天神下同朋町など一部の町丁目に立地していること、上野町2丁目に古着商が集積していることから、同様の傾向がみられた。昭和初期には花街に隣接する町丁目に飲食サービス業が立地し、駅前の町丁目には宿泊業が立地していた。さらに上野町2丁目は衣料品店が立地するなど、昭和初期にも業種構成に差異があったといえる。1950年代も花街を構成する町丁目と駅前の町丁目、広小路に隣接する町丁目で業種構成に差異があった。このことから、太田ほか(2016a)で述べ

られていることは、業種によっては明治初期の段階ですでにその傾向があったといえる。

以上、各時期の商業特性と時期間の変化を先行研究と比較したが、これらをまとめた模式図が第13図である。明治初期には広小路や花街を中心とした商業空間となっていたが、昭和初期に鉄道駅ができると、花街関連の業種を除いて、広小路の中心性は若干衰退する傾向にあり、駅に隣接する町丁目も宿泊業やそれに付随する業種が立地し始める。また、駅から離れた町丁目では地域住民向けと考えられる庶民向けの店舗が多く立地した。1950年代になると、広小路の中心性は明治初期と比較すると衰退するものの、業種構成では買い物客が集う洋品店や飲食サービス業が立地していた。かつての花街は、酒場など主に夜間に男性を主たる顧客とした酒類提供店が立地した。駅から離れた町丁目では昭和初期の商業特性を引き継ぎ、飲食料品関連業が多くみられた。



第13図 上野地区の商業特性の変化に関する模式図

このように近代期における上野地区は、鉄道駅の立地に伴い、その周辺を中心性が高まったことによって、商業空間の構造が変化しながらも、前の時代の商業特性や百貨店の位置の影響を受けるなど、歴史性が反映されていた。なお、本研究では明治初期から1950年代までを扱い、現代については扱うことが出来なかった。これについては今後の課題としたい。

謝辞

本論文は、2018年に東京学芸大学に提出した卒業論文を加筆・修正したものである。また本論文の内容は、2018年3月に開催された第66回全国地理学専攻学生卒業論文発表大会（於：東京学芸大学）で発表した。本研究を進めるにあたり、牛垣雄矢先生をはじめとする東京学芸大学地理学研究室の先生方には懇切丁寧なご指導やご助言を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 1888（明治21）年に公布された「東京市区改正条例」に基づく近代的都市計画事業。都市化の進展により事業は縮小・早期化され、1914（大正3）年事業完了。事業内容は皇居周辺への政治経済機能の集中、道路や鉄道等の交通計画、公園や火葬場等の施設計画、上下水道計画などである。それまでの銀座煉瓦街建設（1882～1887年）をはじめとする市民生活向上のためではなく、外交政策の一環として近代国家の体裁を整えようとしたものとは性質が異なる。
- 2) 横山錦柵（1880）による。業種、商店主氏名、住所が記載されており、明治初期における業種別の商店分布を把握することがで

きる。

- 3) 東京都台東区役所編（1955）による。
- 4) 1956年発足。同会ホームページによると、2020年10月現在の加盟店数は69となっている。上野地区毎月発行しているタウン誌『うえの』は発足当時から発行しており、2020年10月で737号となる。
- 5) 『うえの 9月号』。上野のれん会編集部、1959年9月1日発行より。
- 6) 前掲5)。
- 7) 前掲5)。
- 8) 江戸幕府や諸藩に所属する徒歩で戦う下級武士のこと。
- 9) 前掲3)。
- 10) Azby Brown（2011）による。
- 11) 大日本商工会（1931）による。業種、商店主氏名、営業税額のほか、一部の商店には創業年や商店名、所得税、資本金なども掲載している。ただし、芸妓置屋など芸妓関連施設は掲載されていない。
- 12) 前掲3)。
- 13) ここでは「和洋各料理」「喫茶店（団子饅頭）餅菓子・汁粉類」「食堂酒場（飲食物）」「蕎麦饅頭（小料理）」「寿司（小料理）」とした。
- 14) 前掲3)。
- 15) 前掲5)。
- 16) 『うえの 10月号』。上野のれん会編集部、1959年10月1日発行より。
- 17) 東京都交通局編（1991）による。
- 18) ここでは、「料理店」「喫茶店」「日本料理店」「中華料理店」「すし店」「そば・うどん店」「食堂・レストラン」「酒場・ビヤホール」「バー」「ナイトクラブ」「キャバレー」「その他の飲食店」とした。
- 19) ここでは、「履物店」「衣料品店」「呉服・和服店」「古着店」「染物店」とした。

- 20) ここでは、「食料品店」「酒店」「豆店」「果物店」「肉店」「魚店」「青果店」「海苔店」「パン店」「茶店」「豆腐店」「米店」「調味料店」「乾物店」「惣菜店」「加工食品店」「牛乳店」「水産加工品店」「その他」とした。
- 21) 池田文痴菴 (1960) による。
- 22) 明治製菓四十年小史編集委員会編 (1958) による。

参考文献

- 池田文痴菴 (1960) : 『日本洋菓子史』 日本洋菓子協会, 1288p.
- 牛垣雄矢 (2003) : 東京の内部地域における商店街の歴史的变化 — 神楽坂を事例として —, 地理誌叢, 45 (1), pp.17-30.
- 太田慧・杉本興運・菊地俊夫 (2016a) : 東京・上野地域における商業集積地の土地利用と空間特性, 日本地理学会発表要旨集, 89, p.79.
- 太田慧・杉本興運・菊地俊夫 (2016b) : 東京・上野地域における商業集積地の変容, 日本地理学会発表要旨集, 90, p.151.
- 太田慧・杉本興運・菊地俊夫・土居利光 (2017) : 東京・上野地域における商業集積地の空間特性の分析, 観光科学研究, 10, pp.1-8.
- 加藤政洋 (2005) : 『花街 異空間の都市史』 朝日新聞社, 322p.
- 神崎宣武 (1991) : 盛り場の起点と条件 — 上野広小路界隈の変遷から —, 国立歴史民俗博物館研究報告, 33, pp.25-41.
- 神崎宣武 (1993) : 『盛り場の民俗史』 岩波書店, 227p.
- 陣内秀信 (1992) : 『東京の空間人類学』 筑摩書房, 332p.
- 東京都交通局 (1991) : 『わが街 わが都電』 東京都交通局, 204p.
- 東京都台東区役所 (1955) : 『台東区史 上巻』 東京都台東区役所, 1392p.
- 班目文雄 (1989) : 『江戸東京・街の履歴書2 浅草・上野・谷中あたり』 原書房, 273p.
- 松川二郎 (1929) : 『全国花街めぐり』 誠文堂, 750p.
- 松川二郎 (1932) : 『三都花街めぐり』 誠文堂, 199p.
- 松澤光雄 (1986) : 『繁華街を歩く 東京編 — 繁華街の構造分析と特性研究』 総合ユニコム, 379p.
- 明治製菓四十年小史編集委員会編 (1958) : 『明治製菓四十年小史』 明治製菓株式会社, 397p.
- Azby Brown (2011) : 『江戸に学ぶエコ生活術』 阪急コミュニケーションズ, 217p.

Changes in Commercial Characteristics and Spatial Structure in Ueno Area During the Modern Period

MORIYAMA Tomoki*

Keywords : Commercial Characteristics, Spatial Structure, Change of Commercial Area, Modern Period, Ueno Area

*Koshigaya Elementary School